ヘンリー・ジェイムズ『信頼』

水野尚之　訳

第二十一章

それは彼を一種の畏れで満たした。その感覚は決して心地よいものではなかった。それは興奮から趣を引き出す能力に長けたバーナード・ロングヴィルのような男でさえも、すぐには慣れられない感覚だった。そしてその晩中、その感覚のおかげで我々の主人公は、自意識を持ち始めた恋人がなると思われるような幸福な男というにはほど遠い状態だった。間違っており、不名誉であり、ありえないことだった。しかしそれは事実だった。それは彼の個人的な経験の中ではこれまでなかったことだった。彼はこれまで、展望においてまた内省において、代理として生きていたように思われた。反響であり影であり不毛な試みであったように思えた。しかし今回はとうとう人生そのものであった。これが事実であり、現実であった。こうしたもののために人は生きるのであり、こうしたもののために人は死ぬのだ。これ以前には愛は寓話であった。疑いなく非常に美しい寓話であった。情熱は、明らかに相当の効果をもって用いられた文学上の表現だった。しかし今や彼はこうしたなじみのある概念と個人的な関係を持った。そしてそのことがそれらの概念に、より強烈な意味を与えたのだ。それらの概念は暗闇

で彼に手を置いた。彼はその手を肩に感じ、その重みによって、それが運命の手であることを知った。この感覚を衝撃的なものにしたのは、それと混じり合ったある要素であった。その要素とは、この感覚が単独でただやってきたのではなく、それがたちまち溶け込み隠れてしまうような影をともなっていたという事実であった。それは禁断の果実だった。それに触れた瞬間に彼には分った。今目の前に神々しくきらめいているまさにこれをするまいと自分に誓ってきた、裂け目を広げまい、自分に光の洪水をもたらすようなドアを開けまいと誓ってきた、と彼は思った。友情や名誉が危うくなっていた。それらは彼の左手にあり、生まれたばかりの情熱がすでに右手にあった。それらも同様に彼に呼びかけており、それらは鋭い痛みをもたらすような力で彼をつかんでいた。魂は身体よりもいっそう繊細な組織であり、暴力にさらされると思うだけで萎縮するのだ。暴力は、精神的な暴力は、我々の贅沢な主人公が恐れるものだった。そして夜遅くに海辺に佇み、波のうねりが耳にますます深く響いてきた時、前途がはっきりとした恐怖の要素をもつようになったと言っても過言ではない。彼の状況の二つの面は対峙していた。それは厳しく容赦ない対立だった。バーナードはそれが一体どうなるのかと怖れを抱いてしばらく息をつめた。彼は長い間浜辺に坐っていた。夜が大変寒くなってきたが、彼は寒さを感じなかった。やがて彼はそこを去り、またカジノの前を通って村の中へとさまよっていった。カジノは暗闇と静寂に包まれていた。小さな町の通りには海の潮の香り、魚のもやっとした匂い、砕ける波の遠い響きしかなかった。バーナードは驚かされたという感覚を少しずつなくしていき、自分の苦境を論理的に考えることができると思いはじめた。それは悩みであった。もっとも、明るい魅惑を意識している状態につけるにしては、これは妙な表現だとは思えたが。この件に関してしっかりと相談を受けた理性は、彼がこの三年間というものいかなる時もアンジェラ・ヴィヴィアンを愛していたと彼に最初に告げた。この賢い能力は彼にさらなる情報を授けた。しかしそのうちのほんの二、

三の項目だけがここに述べるに足るものである。自分がどうなったかをもっと早く発見できなかったとは、彼は大馬鹿者、信じられないほどの馬鹿者だった！　自分は鋭敏である、いつも相当鋭いというバーナードの自信がこれほどの打撃を受けたことはなかった。その打撃は、実に多くのことが彼の賢い頭が思ってもみない間に彼の賢い頭の中で起こっていたという認識としてやってきた。しかし自分が何を思っていたかとか今どう思うだろうかなどというのはほとんど問題にならない、と彼の理性は断じ続けた。彼のさしあたっての仕事は、明日の夜明けとともにブランケ・レ・ガレを立ち、二度とアンジェラ・ヴィヴィアンを見ないことであった。これが彼の義務だった。これには、完璧に明瞭であり決定的であり理解しやすく、彼に見えるかぎりにおいてわずかな現実的な困難もともなわないという利点があった。そればかりではない、理性は語り続けた、精神的な困難も同様に取るに足らなかった。彼はこれまでヴィヴィアン嬢に情熱的な言葉をささやいたことは決してなかった。まったく逆だった。彼は決して身を危うくしたことはなかった、また彼の内なる炎を思わせるようなわずかな根拠さえ彼女に与えたことはなかった。だから彼女に背を向けるのもまったく自由だった。彼女の愛情を弄んだというような非難を被ることはありえなかった。バーナードは、選択という苦しみを免れること、自分の前のまっすぐな道を見て、それに従いさえすればよいと感じることが最大の幸福だと思うような心理状態にあった。私が示してきたまっすぐな道に、彼はじっと目を凝らした。もちろん朝のできるだけ早い時刻に彼は発とうと思っていた。彼が宿屋の戸を叩いて入れてもらったころには、東の空には朝日が差してきていた。戸はナイトキャップをかぶり粗末な装飾を身につけた怪しげな老女が開けてくれたが、それが誰なのか彼には確かめられなかった。彼は横になって休んだ。とても疲れていた。そして注意は、出発という考えに、まさにそのイメージにしっかりと向けられていた。

しかしながら翌朝かなり遅くに目覚めた時、彼の注意は非常に異なったものに向けられていた。視界は楽しげな事実の明るさに満たされていた。そしてそれは甘美な朝の空気に浸みこみ、開いた窓から吹き込む新鮮で軽やかな海からのそよ風にはためいているように思われた。二、三の赤いタイル屋根のあいだに海が広がっていた。海はこれまで見たどの海よりも青かった。彼は長くは眠っていなかった。ほんの二、三時間寝ただけだった。しかし怖れはまったくなくなっていた。影は消えてなくなり、彼の愛のすばらしさ以外何も残っていなかった。その愛はさわやかな早朝の大気の中で輝いているように見えた。彼は突然幸福感を感じた。まったく唐突に黄金郷（エル・ドラド）を見つけたかのようだった。結果は別にして。彼は結果のことは考えなかった。それはもちろん別の問題なのだ。彼の気持は本質的に彼がこれまで感じた最上のものだった。そして彼はこれまでこのような単なる気持を扱ったことがなかった。結果を考えることなど容易に後回しにできるだろう。そのあいだに自分の心の状態からちょっとした主観的な喜びを静かに引き出したとしても、誰にも迷惑はかからないだろう。花は、根元から摘み取る前に、一日開かせておこう。彼はこのようにしっかりと心に決めた。このような雄々しい決心から見ると、主観的な間奏曲など正当な特権にすぎないと思われた。ブランケ・レ・ガレを午前九時に発つというという計画は彼の心から軽やかに音も立てずに抜け落ちた。しかし別の計画が浮かんできた。その計画は一層素晴らしく思われたが、それは長い散歩に出て一日留守にするというものだった。バーナードは杖をつかんでさまよい出た。彼は遠くの崖の巨大な肩を登り、水平な高原へ出た。そこでは彼の思いのまま遠くへ歩いていっても何の障害もなさそうだった。夏はまだ輝いており、暑くて静かな日――日曜日だった――は、自然の顔に深くて無言の微笑みを与えているようだった。一方では海が輝き、他方では農作物が実っていた。強烈な陽光に姿を隠しながら、ひばりがあちこち見つかりにくいところで鳴いていた。散歩中に時折立ち止まったバーナードには、はるか下の崖のふ

もとから聞こえてくる波の物憂げなつぶやきをのぞけば、この鳴き声が唯一の音だった。彼は何マイルも歩き、半ダースもの粗末な漁師村を通った。それらの村は崖の坂になった窪地にあったが、ノルマンディーの海岸に沿ったそれらの崖のいくつかは、ここ数年、二、三のホテルが建ったり、移動更衣車の列ができたりしていた。彼はずいぶん遠くまで歩いてきたので、止ろうと思ったときには影が長くなりはじめていた。午後ははじまっていたばかりか、すでに傾こうとしていた。草の生えた丘陵地がまだ彼の前にのびており、ところどころに浅いが風のない谷間の影ができていた。彼は柔らかい場所を探し、草地に身を投げ出した。長いあいだ横になって、たくさんのことを考えた。今日一日は幸福感に身を捧げようと決めていた。その幸福感はまったく無害なものであり、思考の満足、単なる意識の喜びであった。しかしこんなものであれその感覚は彼から離れず、心の中で苦しみに変わることもなかった。そして、ひょっとしたらという考えのまわりを絶えずめぐっていた彼の心がその羽根を休めはじめる前に、長い夏の日が暮れてきた。彼がふたたび立ち上がった時、やってきたようにブランケへ戻るには遅すぎた。夜は迫っており、陽光はすでに消えつつあった。彼がしていた散策は、非常に疲れたと感じたわけではなかったとしても、暗闇でそれを繰り返すのは思慮に欠けていると思わざるをえないようなものだった。彼は最寄りの村へ行き、田舎くさい小型の馬車を雇うことができた。その素朴な乗り物に乗って街道を進みながら、夜の何時間もかけて出発点へゆっくりと揺られながら彼は戻ってきた。宿屋に着いたころには夜半まで一時間になっており、彼には寝る以外にすることはなかった。

明日の朝早くブランケを発つという確固とした決意を、彼は想い出した。しかし翌朝になると、ヴィヴィアン夫人と娘にお別れを言い、自分の意向を伝える、ということをしないで発つのは、ただ馬鹿げていると彼は思うようになった。彼女たちがここにいるのを知って彼がとても嬉しくなり、少なくとも彼女たちと同じほどの期間

ブランケに滞在するつもりだと、彼は彼女たちに理解させたのだ。晴れた日曜の丸一日中、彼女たちのことでどうやら頭を悩ますことなく過ごすなどとは、きっと礼儀を欠いた男だと彼女たちに思われたに違いない。また彼が娘に恋しているという不運な事実が彼に自分の義務を果たさせる理由であるとしたら、少なくともそれは無礼をはたらく理由にはならない。彼はまだそこまでには、つまり無礼を美徳の付随条件として受け入れるというところまでは至っていなかった。美徳とは世界で最上の作法のことである、というのが常に彼の理論であった。そして自らを滑稽な立場に置くことなく自分の清廉さを守ることができる、と彼は少なくともうぬぼれていた。それゆえ、午前中の彼がふさわしい時間と考えた時刻に、二日前にアンジェラ・ヴィヴィアンが母親の住まいへと案内した小道を、彼は通っていった。その粗末な玄関を彼は叩いた。小さな別荘の窓は開いていて、植木鉢の後ろの白いカーテンは、以前見た時と同じようにはためいていた。戸は小奇麗な若い女によって開けられたが、彼女はすぐさま、奥様とお嬢様は二、三時間前にブランケをお発ちになったと彼に告げた。お二人はパリにお行きになった、そうです、ほんのわずかなお荷物だけをお持ちになってまったく急にです。そして私を――私はあの方々にお仕えさせていただいているのですが――ここに置いて、お荷物の残りを片付けるように、またできるだけ早く後を追ってくるようにとお命じになりました。バーナードが驚きを表し、お二人はこの季節の終わりまでこの浜辺におられるものとばかり思っていましたと告げると、どうやら非常に賢いらしい小間使いは、どうか以下のことをお伝えさせてくださいと言った。この季節は終わろうとしています。奥様は別荘を五週間借りられただけで、あと十日しか残っていませんでした。旦那様もご存じかと思いますが、奥様方は大変なご旅行好きで、世界の半分は回っておられ、一時間後に住処を撤収することなど苦になさりません、要するに奥様は、この国の別の場所へと行く用事を伝える電報をきっと受け取られたのですわ。

「それであの方たちはどこへ行かれたのですか」バーナードは尋ねた。
「しばらくはパリです」
「ではパリのどこへ行かれたのですか」
「奥様のお家へです」小間使いは答えたが、どうやらバーナードが多くのことを尋ねすぎると思ったらしかった。
しかしバーナードは食い下がった。「お家はどこにあるのですか」
侍女は彼の頭から足先まで見た。
「旦那様がお手紙をお書きになりたければ、奥様のお手紙の多くは奥様の銀行家へ着きます」彼女は謎めいて言った。
「それで彼女の銀行家は誰ですか」
「プロバンス通り(リュ・ドゥ・プロバンス)に住んでいます」
「結構です。その人を見つけ出しましょう」[1]我々の主人公は言い、立ち去った。
このささやかな物語に興味を抱いてきてくれた読みの鋭い読者は、無理もないことであるが自らの鋭さを自覚しつつ、おそらくこの時点で「もちろん主人公は翌日プロバンス通り(リュ・ドゥ・プロバンス)へ行った！」と言うだろう。もちろんそれはもっともである。ただ、実際には、バーナードはその種のことはしなかった。彼はこれまでの人生でしてきたもっとも奇妙な行動の一つ――その時でさえ彼を戸惑わせたばかりか、そのようなすばらしい離れ業をする能力を自分がどこから引き出してきたのだろうかと、後になって彼自身がたびたび考えることになった行動――を取った。彼はただ、ブランケ・レ・ガレで二週間を過ごしたのだ。それは非常に静かな二週間だった。彼は誰にも話しかけず、誰とも知り合いにならず、ただ一人で過ごした。一人でいることに彼が今ほど快く思ったことはなかっ

た、とつけ加えてもいいだろう。彼は自分のことを、アンジェラ・ヴィヴィアンについて実際にかかわり合うことを差し控えさせる――それも見事に差し控えさせる、ということが大事なのだが――ような仕方で物事を見る、分別のある繊細な男だと思った。プロバンス通りでその銀行家を見つけ出しましょうと言ったのは、小間使いのためであった。あの小間使いはかなり生意気だと彼は思った。その古典的な通りへ入っていく気など、本当は彼にはなかったのだ。崖の下に沿ったり褐色の海食洞の中に入ったりと、彼は長い散歩をし、浜辺をぶらついた。この物語の早い段階で起こったある出来事についてじっくりと考えた。未来のことは思考の対象にしなかった。それゆえ彼の想像力が過去の暖かくなじみのあるエピソードに逃げ込んだのは必然的な結果だった。どうしてヴィヴィアン夫人があれほど唐突にこの地を去ったのだろうか、と彼は考えた。そしてもちろん今回の出来事とバーデンから彼女が突然発ったあの時との類似性について思いが至った。それは彼を困惑させ悩ませたが、傷ついたアンジェラを浜辺で最初に見つけた時に感じた驚きをふたたびかき立てはしなかった。その驚きは、その後の時間とその晩の短い会話におけるアンジェラの態度によって消されていたのだ。その晩こそは永遠に記憶すべきものとなるはずだった。それはいまだに時折バーナードをふいに震えさせる啓示をともなっていたのだ。とはいえそれはまた、偶然の出会いが彼女について述べたかもしれないことなどアンジェラはできる限り気にしない、という確信を彼にもたらした。それゆえ、ブランケで二週間過ごした後のある晩、彼の心の中で一連の思考が突然動き始めたのはますますもって奇妙だった。それは外の出来事ではなく想像や記憶のゆらめく火花によって引き起こされたものであり、その直接的な効果として、我らの主人公を私が述べたあの晩に驚かせたように今回も驚かせたのだった。状況は同じだった。彼は非常に遅く一人で浜辺へさまよい出て、闇にうねる海を見て立っていた。突然、かつて語りかけた同じ声が暗闇の中でまた呟いてきた。そしてその声はその夜の間じゅう彼の耳に響

いていた。すでに述べたように、それははじめ彼を驚かせた。それから翌朝になって、彼をパリへ出発させることになった。旅行の間じゅうその声は彼の耳にとどまった。その反響を長引かせるべく、彼はぼんやりと目を閉じて客車の隅に座っていた。その反響は、たとえ本当でないとしても、少なくともイタリア人が言うようにもっともらしいもの（ベン・トロヴァート）であり、それが思考に耐えるのはすばらしかった。それは語るにはやや耐えないが、私は少なくともそのヒントを与えることはできる。アンジェラが彼を憎んでいるという理論は彼女を目の当たりにして消え去っていたが、まったく別の種類の理論が生まれていた。それは実に多くの事実に適合し、実に多くの矛盾や変則や神秘を説明した。またその理論は、ヴィヴィアン嬢が立腹しているという理論より、数時間以内にブランケを発たなければならないと彼女が母親に言いたてた事実をうまく説明した。いずれにしてもその理論は、バーナードのためらいを効果的に消し去り、パリに着くや直ちにプロバンス通りへ向かわせた。この通りには銀行は一つ以上あったが、ヴィヴィアン夫人がもっとも取引をしていそうな銀行があった。彼は自分の読みが正しかったのを知り、夫人の住所を手に入れるのに苦労はしなかった。しかしここまでしたものの、彼は決してただちに夫人の家に行ったわけではなかった。彼は二、三日待った。おそらく私が先ほど言ったあれらの忘れられていたためらいに甦る機会を与えるためだっただろう。ためらいはまったく静かにしていた。それらを甦らせるのにバーナードが大して骨折らなかったことも述べておかなければならない。パリに三日間滞在した後で、彼はヴィヴィアン夫人のドアを叩いた。

第二十二章

そのドアは、ブランケで彼が会った小柄な小間使いによって開けられたが、彼の問いに答える前に彼女は非常にきつく彼を見た。

「ヴィヴィアンさんのお住まいを僕が見つけたことがお分かりでしょう。あなたは住所を教えようとなさいませんでしたが」バーナードは微笑みながら彼女に言った。

「旦那様は少し時間をかけられました！」若い女性は素っ気なく応えた。そして彼女は、奥様はご在宅ですがお嬢様はご在宅ではありません、と告げた。お嬢様のことは、彼は尋ねなかったが。

ヴィヴィアン夫人は、凱旋門の近辺を飾っている背の高い白い建物のうちのひとつの最上階の小さなアパートに住んでいた。九月の初旬になっていたが、パリはまだ不在者たちの都市だった。暖かく魅力的な気候であり、初秋の大気のある種の香りは、この高貴な地区のがらんとした通りや閉じられたシャッターという幾分物悲しい側面と調和していた。そしてこの堂々たる通りの先は、セーヌ川からの立ちのぼるもやで覆われているようだった。バーナードがヴィヴィアン夫人の高い小さな応接間に招き入れられたのは、午後遅くだった。かすかに赤みを帯びた夕日が金色に塗られた壁に柔かく落ちていた。これまでバーナードは、彼女たちとは貸家や臨時の住処にいるところでしか会ったことがなかった。しかしここは彼女たちが本当に住んでいる場所であり、彼女たちの趣味、習慣、そして魅力の刻印が押されていた。小さな客間は実に上品だった。きれいな物がたくさんあり、それらはバーナードの目には完璧に整えられていた。長い窓――天井が低いので、窓の高さは本当に非常に低いものだった――は、アパートの横幅全部を占めているがっしりしたバルコニーに向かって開いていた。そういうバ

ルコニーはパリでは五階以上に住んでいることへの埋め合わせであったが、このバルコニーには花と方円柱頭で溢れていた。ヴィヴィアン夫人が現れるのを待とうとバーナードはバルコニーに出た。そして彼女がなかなか現れなかったので、このバルコニーからはすばらしい景色を楽しめると実感できるだけの時間が彼にはあった。ここからは、シャンゼリゼの木々の緑のこずえの近くに絵のような角度で姿を現している凱旋記念の門が臨めた。木々の先にはセーヌ川の幅広いきらめきが、またノートルダムの巨大な塔も遠くに青くかすかに見えた。広大な都市全体が眼前にまた眼下にあった。それは整然とした輝きと、圧縮と拡張が混在した外観を見せていたが、それでいて巨大なパリのつぶやきは、ヴィヴィアン夫人の最上階の部屋に達する前に消えていた。バーナードにはここが、彼がこれまでに知った中でもっとも明るく静かな住まいと感じられた。

女主人がとうとう衣ずれの音を立てながらやってきた。興奮しているようだった。彼女はドレスの端で小さな金塗りの椅子を倒した。その金色は、鏡のように磨かれた寄せ木張りの床に反射していた。夫人の笑みはこわばっていた。何と言うべきか分からなかったのだ。

「ご住所は銀行で見つけました」バーナードは言った。「ブランケであなたの小間使いは僕にご住所を教えてくれなかったのです」

ヴィヴィアン夫人は彼をちょっと見た。彼女の顔にはいつも何か言いたげなところがあった。今の目つきは、どうか私を許してくださいと相手に頼んでいるのに等しいとバーナードは思った。

「小間使いは変わっていますから」彼女はつぶやいた。「特にフランス人は！」

さしあたり彼女を許したくないとバーナードは思ったが、彼女に優しくすることに一種の喜びも感じた。

「何の説明も手がかりも伝言も僕に残されないで、あんなに急にブランケを去ってしまわれたので、僕にあとを

追ってほしくないのでは、と最初は思いました。三年前に、覚えておられますか、バーデンを発たれた時のことを思い出しましたよ」

「バーデンはとてもすばらしいところでした。でもずっとはいられませんから」ヴィヴィアン夫人は言った。

「ずっといられるのではないか、と僕は思っていました。僕たちの生活はとても楽しかったので、その魔法を破るなんて恥ずべきことだと思えたのです。もし誰も動かなかったら、きっと我々は今でもバーデンにいるでしょう」

ヴィヴィアン夫人は目を見開いたが、笑みはこわばったままだった。

「きっとひどい天候になっていたでしょう」

「おそらくそうでしょうね」バーナードは笑いながら言った。「我々の上機嫌に、静かな幸福に、自然が嫉妬したことでしょう。それに結局、我々はまたここで一緒になりました。我々のうちの何人かですが。でも僕だけが厚かましくもこれに感謝しているわけです。僕がふたたび現れるのをあなたがまったく喜んでおかれないだろう、と僕は自由に思っていました。僕が今日ここへ思い切って訪ねてきたのは、僕が簡単には落胆しない人間、たぶん実際かなり厚かましい奴だからにすぎないのです」

「また現れてくださってとても嬉しいですわ、ロングヴィルさん」ヴィヴィアン夫人は誠実な口調で言った。

「それでは、ブランケから逃げたのはお嬢様のお考えだったと」

ヴィヴィアン夫人は視線を落とした。

「フォンテンブロー[2]へ行かねばならなかったのです。そこから戻ってきたばかりなのです。あなたにお手紙を書こうと思っていました」彼女はやさしくつけ足した。

「いや、そうだったら僕はどんなに嬉しかったでしょう！」
「つまり、私たちの居所と、お会いできたらどんなに嬉しいかをお伝えしようと思ったのです」
「そのご意思だけでも感謝します。どうやらお嬢様は、あなたがそれを実行に移すことをさせなかったようですね」
「アンジェラはとても変わっています」ヴィヴィアン夫人は短く言った。
「最初にお会いしたときにもそうおっしゃいました」
「そうです。シエナで」ヴィヴィアン夫人は言った。
「あの地のことをあなたが率直におっしゃるのを聞いて嬉しいです」
「たぶんその方がいいでしょう」ヴィヴィアン夫人はつぶやいた。彼女は立ち上がって窓のところへ行った。そしてバルコニーへと踏み出し、しばらく通りを見ていた。「あの娘はすぐに帰ってきます」彼女は言い、また部屋へ入ってきた。「お隣りに住んでいるお友達に会いに行きましたの。私たちはもうシエナのことは気にしていません」彼女は穏やかにつけ足した。
バーナードは彼女を理解した。これが夫人がバーデンで彼に向かってした要求の撤回であることを理解した。
「ああこのご婦人は」彼は独りごとを言った。「まだ娘を結婚させたがっている。ただ、今となっては娘を僕と結婚させたがっている！」
彼女の考えを理解した、と彼は夫人に示したかった。そして夫人の手を掴むか握り締めるかキスするか、自分でもよく分からないことをするために、彼が彼女の手を握ろうとした時、彼は小さなアパートの戸についている鐘が鋭い音を立てるのを聞いた。

ヴィヴィアン夫人は慌てて身を引いた。

「アンジェラです」彼女は声を上げた。そしてハンカチを唇に押しつけて、バーナードに微笑みながら音が聞こえるのを待っていた。

まもなく娘が応接間に入ってきた。しかしバーナードを見ると、戸のノブに手を置いて立ち止まった。

「ロングヴィルさんよ、お前。私たちを見つけ出されたの」

「私たちを見つけ出された、ですって」アンジェラは少し笑いながら繰り返した。「何と変な言い方ですこと！」

彼女は、ブランケで初めて彼に会ったときと同じように、顔を赤らめていた。バーナードには彼女が今見事で特有の明るさ、彼女がこれまで持ったことのないようなものを持っているように見えた。

「僕はたしかにあなた方を探しました」彼は言った。「ブランケから飛び去られたのを知ったときには、ひどく落胆しました」

「飛び去られた、ですって」彼女は母親の言葉を繰り返したように彼の言葉も繰り返した。「これもまた妙な言い回しですこと！」

「どういう言い回しでも僕は構いません」バーナードは言った。「僕があなた方にぜひともまた会いたいと思っていたことと、思い切って行なうべきか毎日考えていたことを、あなた方に分かっていただけるなら」

「なぜあなたが思い切って行なわれないのか、分かりません！」彼女はさえぎり、また少し笑った。「私たちはそんなひどい人間ではないわね、おかあさん。つまり、ひとたび五階の階段を登ってこられたからには」

「すばやく登ってきました」バーナードは言った。「そしてお住まいがすばらしいことが分かりました」

「ロングヴィルさんにはまた来ていただかなくてはいけないわね、お前」と母親が尋ねた。

「お許しをいただければ、頻繁に参ります」バーナードはきっぱりと言った。
「それはご親切に」アンジェラは目をそらしながら言った。
「あなたがそう思ってくださるか、自信はありません」
「あなたが何を証明しようとなさっているのか分かりません」アンジェラは言った。「先ず私たちがあなたから逃げたこと、それからわたしたちがお客様を大事にしないこと、ですね」
「いや、それは違いますよ！」バーナードは大きな声を上げた。「あなたが僕にどれほど冷たくされても、僕は構わないですから」
彼女は別のドアの方へ歩いていったが、その戸はカーテンで覆われており、彼女はそれを持ち上げた。
「それを聞いて嬉しいですわ。私がとても疲れていておいとましたいと思っていることを、あなたにお伝えする勇気が湧きましたから」
彼女は肩ごしにちらと彼を見て、ドアを過ぎ、カーテンを降ろした。
バーナードはその場にいてヴィヴィアン夫人と相対していたが、夫人の目はこれまでにも増して彼に訴えかけているように見えた。彼自身の目には、興奮した笑みが浮かんでいた。
「どうかお気になさいませんように」彼女はつぶやいた。「あの娘が疲れているのは本当だと私は知っています」
「気にするですって、奥さん」若者は大きな声で言った。「僕は楽しんでいます。あれこそまさに僕が好きなことなのです」
「ああ、あの娘はとても変わっています！」ヴィヴィアン夫人はため息をついた。
「彼女は変わっています。その通りです。しかし僕には彼女が少し理解できるように思います」

「では、明日またおいでいただかなければなりません」

「たくさんの明日がありますように！」バーナードは帰りがけに大声で言った。

第二十三章

そして実際彼にはたくさんの明日があった。翌日彼は同じ時刻に訪問したが、母と娘はきれいな客間にいた。アンジェラはとてもおとなしく愛想がよかった。昨日彼女が彼に会った際の礼儀について、ヴィヴィアン夫人が優しくちょっと説諭をしたのではないか、と彼は思った。彼が来て五分後には、ヴィヴィアン夫人はテーブルにあったデカンターを取って、花に水をやるためにバルコニーへ出て行った。バーナードは部屋の中で座ったまま夫人をしばらく見ていた。彼女はバルコニーに沿って歩き、姿を消した。彼女がふたたび現れないまま十分ほどが過ぎた。バーナードは窓の敷居まで行き、夫人を探した。夫人はそこにはいなかった。戻ってきてアンジェラの近くにふたたび座ったとき、彼は、ヴィヴィアン夫人は他の窓のどれかにお入りになったとやや堅苦しく告げた。

アンジェラはしばらく黙っていた。それから言った。

「私に彼女を呼んできてほしいですか」

この娘はとても変わっている。それはまったく本当だ。しかしバーナードは、今では自分は彼女を少し理解できるという昨日の宣言に従った。

「いいえ、僕はそれを望みません」彼は言った。「あなたがお一人のときにお会いしたいです。あなたに特に申

し上げたいことがあります」

彼女は彼の方に顔を向けた。その表情には、今の彼はこれまで見せた以上に真剣だと彼女に思われていると示すものがあった。彼はまた座った。しばらくの間、彼は言い続けるのをためらった。

「怖くなりますわ」彼女は笑いながら言った。そして笑ってはいたが、これが本心なのは明らかだった。

「僕が人を怖がらせようなどと思っていないことは、はっきり申し上げます。反対に、僕はあなたが怖いのです。僕は卑下し、弁解ばかりしてしまいます」

「それはおかわいそうに」アンジェラは言った。「私は弁解を聞くのがとりわけ嫌いです。何のための弁解か分かっているときでも。あなたの弁解が何のためか、私には分かりませんが」

「あなたは僕を嫌がってはいませんね。僕を嫌ってはおられないでしょうね」バーナードは突然切り出しはじめた。

「そんなことは卑下した人のご質問ではございません。だから、私には他のもっと実際的な仕事がありますと申し上げても、どうかお許しください」

「あなたは僕を軽蔑しておられる」バーナードは言った。

「それも卑下してのお言葉ではありません。そのことに固執しておられるようですから」

「結局僕をどう思っておられるかという問題になるでしょう。それに僕にはあなたにそれを考えていただきたい理由があります」

「あなたにはどんなことにも理由がおありになったのをよく覚えていますわ。いつも良い理由ではありませんでしたけど」

「今度の理由はすばらしいものです」バーナードは真剣に言った。「僕はこの三年間あなたに恋していました」

彼女はゆっくりと立ち上がり、顔をそむけた。

「それが私におっしゃりたかったことですか」

彼女は開いた窓の方へ行ったが、彼もついていった。

「お気を悪くなさらないといいのですが。僕は軽々しく言っているのではありません。女性への慇懃な言葉とも違います。僕の存在の真実そのものです。僕も最近まで知りませんでした。奇妙に見えるかもしれませんが。僕は自分で知るより、知ろうとするあるいは知ったと思うより、ずっと前にあなたを愛していました。自分では他のことを考えていたと思っていたときに、僕はあなたのことを考えていました。実に不思議です。そこには僕が理解できないことがあります。僕は世界中を旅行し、興味を持とう、気晴らしをしようとしました。しかし実際はまったくの失敗でした。あなたにふたたびお会いすること、それが僕がしたかったことでした。ブランケで先月あなたにお会いしたとき、僕はそれを知りました。その時、すべてがはっきりしたのです。それが謎に対する答えでした。僕はそれをはっきりと読み取りたかった。確信したかったのです。それですぐにあなたの後を追わなかったのです。僕は自分の心に尋ねました。反対尋問もしました。それは吟味に耐え、いまや僕は確信したのです。僕はまったく確信しています。あなたを自分の命のように愛しています。どうか僕の言うことを聞いてください！」

彼女は聞いていた。まっすぐ窓の外を見て、微動だにせず一心に聞いていた。

「あなたは私のことをほとんど見ておられない」まもなく彼女は、輝く目を彼に向けながら言った。

「僕は十分見ました」バーナードは微笑みながらつけ加えた。「バーデンであなたを十分拝見したことを思い出

してください」
「そうです。でもあれではあなたは私を好きになれなかった。私には理解できません」
バーナードは一瞬顔をしかめ、目を伏せてその場に立っていた。
「それは想像できます。しかし僕には説明できると思います」
「今はご説明にならないで」アンジェラは言った。「もう十分おっしゃいました。またの機会にご説明ください」
彼女はバルコニーへ出て行った。
もちろんバーナードもまもなく彼女の側に立った。そして、彼女が禁じたにもかかわらず説明を始めた。
「僕は自分があなたを嫌っていると思っていました。しかしまったくその逆であるという結論に達したのです。実際は、僕はあなたを愛していたのです。初めてあなたにお会いした時から、つまりシエナであなたのスケッチをした時からそうだったのです」
「そのこと自体にはご説明が必要ですわ。あの時の私は、まったく行儀よくありませんでした。とてもがさつでつむじ曲がりで。ひどい女でしたわ！」
「おや、お認めになりましたね！」バーナードはたちまち嬉しくなって大声で言った。
彼女の顔は青白かったが、突然赤くなった。
「覚えておりますけど、あなたご自身のお振る舞いも変わっていましたわ。かならずしも快いものではありませんでした」
「おそらくそうでしたでしょう。ただ、少なくとも快くしようと思っておりました。あの時はどうしたらあなたのお気に召すか分かりませんでした。今でも学んだとはとても思えませんが。しかしどうか僕に機会をお与えく

ださい」

彼女はしばらく黙っていた。彼女の目はパリの広大な景色を前にさまよっていた。

「今ではどうしたら私が気に入るかお分かりですか」彼女はとうとう言った。「どうか私をひとりにしてください」

バーナードは彼女をちょっと見て、応接間にまっすぐ戻り、帽子を手にした。

「僕が最初の機会を利用したことがお分かりでしょう。しかし僕は明日もまた来ます」

「あなたがおっしゃったことにとても感謝いたします。あのようなお話は、十分に考えてお聞きしなければなりません。明日またおいでください」アンジェラはつけ加えた。

翌日彼が訪れた時、彼女はひとりで彼を迎えた。

「バーデンでのことですが、僕があなたのことを好きではないとどうしてお分かりになったのでしょうか」彼女が許すやいなや、彼は尋ねた。

彼女は実に優しく微笑んだ。

「あなたは私を好きではなかった、と昨日おっしゃいましたわ」

「好きではないと思った、という意味ですよ。どうしてお分かりになったのですか」

「私が言えるのは、私が見て取ったということだけです」

「あなたはとても鋭く見て取られたに違いありません。と言いますのは、表面的には、僕はあなたをむしろ崇拝しているように振る舞っていましたから」バーナードは言った。

「とても表面的でしたわ」

「本気でおっしゃっているのではないでしょうね。僕の崇拝、あなたへの興味は結局そうではなかったわけですから。それは深く、隠れていたのです。表層的ではありませんでした。地下に潜っていたのです」
「あなたは矛盾したことをおっしゃっています。私はまったく一貫しておりますわ」アンジェラは言った。「あなたのお気持ちはまったく上手に隠れていて、私はあなたのお気に触ったと思っておりました」
「バーデンではあなたが矛盾しておられたのを覚えています」バーナードは応えた。
「怖ろしくよく覚えておられますわね！」
「怖ろしいなどとおっしゃらないでください。僕の記憶は、今ではすべてを魅力ある光に照らして、僕たちがついに到達した今の理解という光に照らして見ているのですから。そしてその光は後ろの方に向かっても照らし、あのバーデンの時代をもたっぷりと照らしているのです」
「私たちはついに理解に到達したのですか」彼女は尋ねたが、その真剣な直截さはバーナードはこれまで見たなかでもっとも美しいものであった。
「それはあなた次第です」彼は明言した。そして彼はまた情熱的な愛情を吐露しはじめた。「もう待たせないでください」彼は大きな声で言った。「あなたには考える時間がありました。驚きやショックから立ち直る時間がありました。愛しています。この世界で私に属するすべてのものをあなたに差し上げます」この貴重な誓いを受け止めながらも言質を与えることなく、彼女が澄んだ黒い目で彼を見た時、「ああ、僕を許してくださらないのですね！」と彼はつぶやいた。
彼女は同じく明るい真面目な目で彼をじっと見た。
「あなたの何を許さなければならないのでしょうか」

この問いは彼にはうっとりするものだった。彼は手を伸ばし、彼女の両手を取った。もしヴィヴィアン夫人が入ってきたら、彼が娘の足元に膝まづいているところを見たであろう。

しかしヴィヴィアン夫人は引きこもったままだった。バーナードが夫人に会ったのは次に訪れた時だった。

「私はとても幸せです。娘が幸せだと思いますから」夫人は言った。

「それで僕のことをあなたはどう思われますか」

「あなたはとても賢い方だと思います。娘にとてもよくしてくださると、あなたは私に約束してくださらなければなりません」

「僕にはそれをお約束する賢さはあります」

「そのお約束をずっと守ってくださると思いますわ」ヴィヴィアン夫人は言った。夫人は言葉どおり幸せそうに見えた。そして幸福感によって心の内を多弁に語るようになった。「物事の成り行きはとても妙ですわ。物事の巡りあわせは」彼女は続けた。「娘はずっとあなたが好きだったようです、と申し上げても構いませんわね」

「どうしてもっと早くに教えてくださらなかったのですか」バーナードはほとんど息子が責めるような口調で言った。

「どうして言えまして。私は娘を人様に、とりわけ関心のない人様に差し出すために世界中を回っているわけではありません」

「バーデンでは僕が無関心だとは思われなかったでしょう。僕の無関心が十分ではないことを、あなたは怖れておられました」

ヴィヴィアン夫人は顔を赤らめた。

「まあ、バーデンではちょっと心配しすぎました！」
「僕がお嬢さんに話しかけないようにずいぶん心配なさっていた！」バーナードは笑いながら言った。
「バーデンでは」ヴィヴィアン夫人は続けた。「いろいろと考えておりました。でも今はもう何も考えていません。考えはやめました」
「そうお聞きすると、僕を受け入れてくださったのはとてもありがたいことですね！」バーナードはいっそう明るく笑いながら声を上げた。
「私にはもっといい考えが生まれました」ヴィヴィアン夫人は彼の腕に指先を触れながら言った。「私は自信が持てました」
バーナードは夫人のこの幸福感を励まそうと最善を尽くした。また彼は、それをアンジェラの胸にもっとしっかりと植えつけるために、まだやるべきことがあると思った。
「あなたに告白したいことがあります」ある日彼はアンジェラに言った。「あなたに聞いていただきたいのです」
「とても怖ろしいことですか」アンジェラは尋ねた。
「本当にとても怖ろしいことです。僕はかつてあなたに危害を加えました」
「危害ですって」彼女は繰り返したが、その口調には、それが何を意味するのか分からないということで立腹を情けないほどにまで小さくしようとしていることがうかがわれた。
「どう呼んだらいいのか分かりませんが」バーナードは言った。「よけいなお世話というか、意地悪というか」
アンジェラは肩をすくめた。あるいはすくめる真似をしたと言った方がいいかもしれない。彼女は肩をすくめるような女性ではなかったのだ。

「全然知りませんでした」
「僕はゴードン・ライトにあなたのことを正しく伝えませんでした」バーナードは続けた。
「どうしてあの方のことを私におっしゃるのですか」彼女はやや悲しそうに尋ねた。
「お気に触りますか」
彼女はちょっとためらった。
「ええ、楽しくありません。もしあなたの告白があの方に関係するものであるなら、私はお聞きしたくありませんわ」
バーナードは別の機会にその話題に立ち返った。機会はたくさんあった。彼は毎日の一部をこれらの大切な女性たちと過ごした。こうした日々は彼の人生でもっとも幸福なものだった。秋の日は暖かく心を癒した。街にはまだ人気がなかった。百マイルもかなたにあるような大都市の喧騒が、抑えられ和らいだ音とともに濃密な十月の大気を通して彼らのもとへとどいていた。とはいえ夜は次第に寒くなってきて、ほどなく彼らはヴィヴィアン夫人の分厚いひだのある小さな炉棚に季節ではじめての火を点けた。この時バーナードはアンジェラと坐り、薪が明るく音を立てるのを眺め、冬の夜の魅力が始まったと感じた。薄闇が濃くなっていき、若いふたりだけだった。夕食前の時間であり、ランプが灯される前であった。
「僕はどうしてもあなたに告白したいのです」バーナードは言った。「あなたがそれを許してくださらないと、僕はとても不幸なのです」
「不幸ですって。あなたは最高に幸福な男性ですわ」
「僕はバラの花々の上に横になっている、とお望みなら言いましょう。しかしこの記憶は、この呵責は折りたた

んだバラの花弁なのです。バーデンでは僕はあなたについてまったく思い違いをしていました。あなたについてあらゆる意味で悪く考えていました。いや、少なくともそう言いました」

「男の人たちは鈍感ですから」アンジェラは言った。

「そうだと思います。あまりに鈍感なので、あの時のことを思い返してみると、僕には今でも理解できないことがあります」

「なぜあなたが思い返されなければならないのか分りません。私たちのような立場の人は先のことを見ることになっています」

「あなたご自身はバーデンでの日々がお好きではない」バーナードは言った。「それを考えるのを好んでおられない」

「すばらしいご発見ですこと！」

明るさを増していく暖炉の火に照らされて、バーナードは彼女をちらと見た。

「あそこではあなたはどんな役を演じようとなさったのですか」

アンジェラは首を振った。

「男の人たちは鈍感です」

「それはもう認めました。そしてご説明をお願いする時には、甘んじて屈辱を受け入れます[3]」

「あなたはわたしについてどうおっしゃったのですか」沈黙ののち、アンジェラは尋ねた。

「あなたは浮気娘だと。僕がただ昔のことを言っていることを忘れないでください」

彼女は立ち上がり、暖炉の前に立った。炉棚に手を置き、炎を見ていた。しばらく彼女はそのままでいた。バー

ナードは彼女の顔が見られなかった。

「あなたは結婚するには危険な女だと言いました」彼はゆっくりと続けた。「僕はそう思ったから言いました。僕はあなたについての意見をゴードンに言いました。とても好意に欠ける意見でした。あなたのことが理解できなかったのです。あなたが二役を演じておられると思っていました。あなたが彼と結婚するおつもりだと信じていました。それでいて、僕は見たのです、見たと思ったのです」バーナードはふたたびためらった。

「あなたはなにをご覧になったのですか」アンジェラは彼の方を向いた。

「あなたが僕を励ましておられる、僕と遊んでおられる、と」

「あなたはそれがお好きではなかったのですか」

「僕はこの上なく嬉しいと思いました、自分にとっては！　しかしゴードンにとってはいいとは思いませんでした。そして自分を正しく扱うために言わなければなりませんが、僕は自分のことよりゴードンのことを考えていました」

「あなたはすばらしいお友達だったのですね」アンジェラは素気なく言った。

「そうだったと思います。今でもそうです」バーナードはつけ加えた。

彼女は悲しそうに首を振った。

「かわいそうなライトさん！」

「彼は大事ないい奴です」バーナードは言った。

「まったくいい人です。そして妻である愛情溢れたブランチにとってはきっと大事な人です」

「あなたはゴードンが好きではない。ブランチも好きではない」バーナードは言った。

「その二つはまったく別のことです。ライトさんについては、とてもお気の毒と思いますわ」
「そう思われる必要はありません。彼はとても楽しくやっています」
「そのようにあなたは教えてくださいましたわね。でもやはりあの方をお気の毒に思いますわ」
「それでは僕の質問のお答えにはなりません」バーナードはいくぶん苛立って声を上げた。「あなたはどんな役を演じておられたのですか」
「どんな役だったとお思いになりますの」
「もうずっと前に、僕はさじを投げたと申し上げませんでしたか」
アンジェラは暖炉に背を向けて立ち、彼を見た。手は後ろで結ばれていた。
「バーデンでの私の立場が魅力のあるものだったと思われましたか。あなたに手渡されて、針を刺された昆虫のように顕微鏡で覗かれる、という立場が！」
「一体全体どうしてお分かりになったのですか。僕たちはとりわけ用心していたと思っていましたが」
「そんなことを女性が分らないはずがあるでしょうか。女性は推測し、本能でそれを発見するのです。その女性が誇り高い場合は特にです」
「ああ」バーナードは言った。「誇りが情報の源であるとしたら、あなたは知識の天才です！」
「あなたがとりわけ慎み深いかどうか分かりません！」娘は返した。「どんなにおとなしくて従順な女性でも、自分についてそのような取り決めがなされることに同意しなかったでしょう。自分に対してそのような小細工がなされることに！」
「大切なアンジェラ、あれは取り決めでも、小細工でもありませんでした！」バーナードは口をはさんだ。

「下手な小細工でした。ひどい取り決めでした！」彼女ははっきり言った。「少なくとも、私は大嫌いでした。あなたが私について判断を下すというということ、そのためにバーデンに来られたということが大嫌いでした。まるでライトさんが馬を買おうとしていて、あなたが私を歩かせてみようとしているようでした！」

「僕は何もしようとしていませんでした。することを断ったのです」

「あなたは確かに私を研究しました。私はあなたが間違った結果を得るようにしようと決めたのです。あなたをまごつかせ、誤り導き、打ち負かそうと決めました。というより、決めませんでした。私はただ自己防衛の自然な衝動に従ったのです。批評の厳しい光を避けようとする衝動に。あなたの判断を狂わせたいと思いました」

「あなたは実に上手におやりになられました。私の判断をみごとに狂わせました」

「私がそんなことをする正当な理由があるとしたら、それを上手にやることでした」アンジェラは言った。

「ではあなたが正しかったことが明らかになったわけです！　あなたは僕をひどく嫌っておられたでしょうね」

彼女は彼に背を向けてふたたび火を見つめた。

「そうですわ、私が行なったことの中には、ひどい嫌悪のためということでしか説明できないものもあります」

彼女の言葉があまりに自然に出たので、数ページ前に触れた理論にもかかわらず、バーナードは大いに驚いた。彼はくつろいでいたソファから立ち上がり、彼女のかたわらに一瞬立った。それから彼女の腰に腕をまわし、ほとんど震え声でつぶやいた。

「本当ですか」

「あなたが私に何を言わせようとなさっておられるのか分りません！」彼女は答えた。

彼女を真近に支えながら、彼はしばらく彼女を見下ろした。

「結局のところ、なぜあなたにそんなことを言わせたいと思っているのか、自分でも分りません。自分の呵責がもっとひどくなるだけですのに」

暖炉の火を見つめながら、彼女は何か考えていて、すぐには答えようとしなかった。それから、注意力が戻ってきたかのように、

「まだ呵責のことをおっしゃっているのですか」彼女は尋ねた。

「僕がそのことをきっぱりと言ったことはお分りでしょう」

「私がいやな女だということをですか」

「あなたは結婚向きの女性ではないと」

「ああ、バーナードさん」アンジェラは言った。「あなたが一貫していなくはないことを、あなたに証明することは私にはできませんわ！」

九月は終わろうとしており、彼女は結婚の日取りを決めることに同意した。十月末が選ばれ、ほとんどその選択だけがバーナードの幸福に欠けているものだった。私は「ほとんど」と言ったが、彼の意識の中には死んだように麻痺した点がひとつあったからだ。その点は、彼の精神の他の部分がぞくぞくと期待に満ちて感じている喜びにも染まっていなかった。彼の幸福感を完璧なものにするためには、人生の甘美な風味におけるこの異物を取り除くことが必要だった。九月の終わりにゴードン・ライトに自分の婚約を告げる手紙を書いた時、バーナードは必要な切除を行なったと思った。彼は一日一日とこの義務を遂行するのを延期していた。それを上手に成し遂げるのはあまりに難しいと思われた。しかしとうとう彼は実に簡潔にそれを行なった。これが最良の方法と思ったのだ。彼が投函して三日後に、ゴードンから手紙が来た。ブランチをヨーロッパに行かせようと急に思い立っ

たとのことだった。彼女の具合が思わしくなく、時間を無駄にしたくない。この手紙を書いた後一週間以内に出航するという。手紙には追伸があった。「ラブロック大尉が同行する」

第二十四章

バーナードはパリでゴードンに会う準備をした。手紙によると、二、三日中にでも着きそうだった。イギリスに滞在するつもりはないという。ブランチはフランスの首都にまっすぐ向かい、帽子屋と打ち合わせをしたいと思っていて、その後は冬にはイタリアか東洋へおそらく行くつもりとのことだった。「ローマかナイル川のどちらかを選んでくれと言ったが」ゴードンは言った。「どこへ行こうとまったく気にしない、と妻は言うんだ」

バーナードは友人たちを迎える準備をしたと私は言ったが、それは彼が精神的に、いや知的といっていい面で準備した、という意味であった。具体的にはホテルに部屋を取り、駅へ彼らを迎えに行くという準備をするだけだった。この興味深い三人組がイギリスへ到着したらすぐにゴードンから知らせが来るものと彼は思っていたが、最初の連絡はパリのホテルからだった。それは昼食直前に、非常に短い手紙の形で届いた。彼らは昨夜平和通り(リュ・ドゥ・ラ・ペ)④に到着したという内容だった。

「我々は疲れていて、僕は遅くまで寝ていた」ゴードンは書いていた。「でなければ、もっと早く連絡できたはずだ。できたら昼食に来てくれ。ぜひ君に会いたい」

もちろんバーナードは昼食に行くようにした。彼はただちにミドルセックスホテルのゴードンの居間に行った。昼の食事のためにテーブルが用意されており、紳士がひとりドアに背を向けて立ち、窓の外を見ていた。バーナー

ドが入っていくと、この紳士は向きを変えた。芳香漂う顎髭、均整のとれた体躯、単眼鏡をぶら下げたラブロック大尉だった。

大尉は目に眼鏡をはめ込み、いつものように、つまり昨夜別れたばかりという風にバーナードを迎えた。

「おはようございます！　ひどい朝ですね。どうやらお昼を食べに来られたのですね。僕もお昼を食べに来ました。もうテーブルに並んでいるべきです。ほとんど二時ですから。でも外国人は決して時間を守らないことは、あなたも気づかれたでしょう。時間を守るのはイギリス人の召使いだけです。それに彼らは昼食というものを理解していない。僕らがこんな時間に食事をすることを彼らは理解できないんです。彼らはいつもひどく早い時間に食事をします。バーデンで彼らが食事をしていた時間を覚えておられるでしょう。五時半とか六時半とか、そんなぞっとするような時間でした。アメリカではそんな時間に食事を取るんですね。六時半に人を招いていたのを見ました。食べ物のために急ぐ、と僕が呼ぶやり方です。あの人達はいつも、アメリカ人は食べ物にありつくために急ぐ、と言っていますが。ニューヨークやその種の場所では、食べ物は食べてみればとてもおいしかったと言わざるをえません。僕がアメリカについて何か言うのを、あなたはお気になさいませんよね。アメリカ人はひどく怒りっぽいでしょう。人が彼らの慣例についてわるく言うと、彼らはいつも怒りだします。イギリス人は人が何を言っても全然気にしません。気質が違うんでしょう。アメリカ人といる時は、僕はずいぶん用心します。何についてもちょっとの意見でも言いません。向こうにいた時は、お世辞ばかり言うことにしていました。たっぷりお世辞を言いましたが、彼らは僕のお世辞をみんな真に受けましたよ。結局、彼らの慣例も大して見られませんでした。人々を見るようにしていました。魅力的な人たちもいました。本当に、びっくりした人たちもいました。僕が会ったひとたちの何人かは、あなたもご存知でしょう。他のどこの人たちにも負けない良い人たちで

した。ライト夫人のまわりにはいつもたくさんの人がいました。自分たちは一番良い人たちだと言うんです。夫人はどんなことにもいつも遅れます。いつも、みんながそろってから入ってきます。手袋をはめて、怖ろしいくらいにきれいでした。見たこともないような長い手袋をはめていました。本当に、他のお客がいなかったら、ベルを鳴らして何事が起こったのかと給仕に尋ねたところでした。ベルを鳴らしていただけませんか。ひどい間違いです。彼らは自分たちが昼食と思っていることをしようとしています。これがライトの性格です。いつも何かの考えを実行しようとしています。外国にいる時は、僕は自分から外国風の朝食を好きになろうとします。でも本当に、彼らはこんな時間にこんなことをしようとするのはやめた方がいいです」

ラブロック大尉は、バーナードが以前知っていたころより話好きになっていた。昔の話しぶりはだらだらして断片的であり、我々の主人公は、大尉がたくさんのもつれた話の中から何かつながった考えを追っているところなど耳にしたことがなかった。実際、バーナードの観察眼にとっては、大尉は別人だった。彼の態度には、愛想良くしよう、人の判断を予想しようという落ち着かない願望が現れていた。ほほ笑み丁寧であろう、聞き手を楽しませようという意向が見られ、動きまわり窓の外や時計を見る傾向も見られた。バーナードには大尉がやや神経質に思われ、バーデンの砂利道をいつもの相手――その女性に対する彼の称賛は、明らかにまだかなりのものだった――の横でぶらついていた時よりも、足元が危ういようだった。彼がベルを鳴らし、昼食の給仕の遅れについて尋ねるかどうか、バーナードは見てみたかった。しかし、目下のところ強いとはいえないこの望みが叶えられる前に、ブランチが隣の部屋から入ってきた。バーナードの見たところ、ブランチは、少なくともいつもブランチだった。バーナードにとっては、彼女は何か驚くような変化が起こるとはとても思えない人物だった。彼女の小さく柔らかくか細い声が、昨夜の話のこだまのように絶えず彼の耳に響いていた。どれほど長い間隔を空

けてブランチに会おうとも、彼女は親しげに再登場する、と彼はすでに独りごとを言っていた。実際ある意味でこれは彼女が好ましい印象を与えている証明であり、二人の紳士を見て突然立ち止まり驚きの小さな叫び声を上げた時も、きわめて美しかった。

「まあ、あなたたちがここにおられるなんて知りませんでした。言ってくれませんでしたから。長いことお待ちくださいましたか。ご機嫌よう。私たちが礼儀正しいと思ってくださらないと」彼女はバーナードに手を差し出し、愛想よく微笑んだ。ラブロック大尉の方へはほとんど見なかった。「とてもお元気そうね」彼女はロングヴィルに向かって続けた。「でも、そんなことはお尋ねする必要はありませんわ。あなたはバラのようにお顔色がよろしいわ。いったいあなたに何が起こったのですか。いきいきと輝いておられますわ。男の方にいきいきとなんて言えましたでしょうか。バターや卵についてだけ言えるのでしょうか」

「その男の人次第でしょう」ラブロック大尉は言った。「あなたの後を追いかけて時間をつぶしている男には、いきいきとなどとは言えません！」

「まあ、あなたここにおられたの」ブランチはまた驚きの叫び声を上げて言った。「気がつきませんでしたわ。給仕だとばかり思っていました。これが私の後を追いかけると彼が言っていることです」彼女はバーナードにつけ加えた。「言われもしないのに朝食に来るなんて。なんて妙な風にテーブルを整えたんでしょう！」彼女はちょっと眉を上げてテーブルを見ながら言った。「パリではいつも、彼らは他のことはできなくてもテーブルのしつらえはできる、と思っていました。こんなのは好きじゃありません。両側にひどい小皿が並んでいるなんて！　こんなものはテーブルに置いておくものじゃないとお思いになりませんか、バーナードさん。自分が食べていないものをたくさん眺めるなんて私は好きじゃありません。それに花を置いておくように言いました。花はどこにあ

るのかしら。こんなものを花と言うのかしら。女将の帽子から抜いてきたように見えますわ！　ロングヴィルさん、ぜひ見てください」

「僕みたいではありませんね。とてもいきいきしているとは言えません」バーナードは笑った。

「大したことじゃありません。それを食べなくてはならないわけではありません」ラブロック大尉はうなるように言った。

「そんなものが出てくるとお思いでしょうね。あなたが普段お食べになっている食事からすれば！」ブランチは応えた。「お願いもしていないのにあなたはここに来られたのですから、何かお役に立っていただきたいものですわ。ベルを鳴らしてくださいませんか。もしゴードンが、彼のために私たちがさらに十五分も待つだろうなんて思っているとしたら、長い間耐えてきた妻の忍耐心を買いかぶっていますわ。彼が何をしているかとてもお知りになりたいなら申しますが、彼は気分転換に手紙を書いているんです。夫は一日に八十通も書きます。手紙の相手は頑丈な人たちに違いありませんわ！　ゴードンと結婚したことは私にとって幸運でした。そうでなければ、彼は私に手紙を書いてくるでしょう。夕食の招待に返事を書かなければならないことさえ苦痛なこの私にですよ！　まず第一、私は綴り方が分かりません。もしラブロック大尉が私から手紙を受け取ったなんて自慢したとしたら、それはでっちあげだとお分かりになるでしょう。彼には電報以外に送っていません。それも三通だけで、アメリカで送ったのですが、内容は、彼が我が家に忘れていってどうしたらよいか分からなかったスリッパについてでした。ラブロック大尉のスリッパは扱うには、いえ足蹴にするには些細な問題ではありません。電報では綴りは問題になりません。局の人が直してくれます。直してくれなければ、彼らに任せたらいいんです。このごろではゴードンの背中しか見ません」彼らがテーブルに着く時、彼女は言葉を続けた。「手紙を書いて座ってい

る時の彼の高貴な広い背中しか。それが夫についての私の基本的な見方です。今はパリに来ているのですから、立派な画家にその姿を描いてもらうべきだと思います。きっととても彼らしい姿勢ということになるでしょう。彼の顔をまったく忘れてしまいましたし、覚えているべきかも分かりません」

しかしゴードンの顔は、まさにこの時現れた。彼はすばやく入ってきたが、旧友に再会した喜びで顔が紅潮していた。大西洋を渡ってきたばかりの旅行者らしく日焼けし、正直な目でバーナードに微笑んだ。

「君をここで出迎えなかったからといって、僕のことをひどい奴だなんて思わないでくれ」バーナードの手を握りしめ、ゴードンは言った。「大事な手紙を書いていて、こんな風に考えていたんだ。『もし手紙を途中でやめたら、また戻ってきて書き終えなければならないだろう。だが、もし今書き終えたら、今日の残りすべてをあいつと過ごせる』だから手紙を最後まで書いたんだ。もう我々には邪魔はない」

「ゴードンが論理的に考えぬいたことははっきりお分かりでしょう」ブランチは言った。一方、夫の方はラブロック大尉に黙って手を差し出した。

「ゴードンの論理は、他の人たちの感情と同じくらいすばらしい！」バーナードは断言した。ゴードンに何か非常に楽しいことを言いたいと思い、ブランチが夫について少し皮肉な言い方をするのをいいとは思わなかった。

「そしてバーナードの褒め言葉は、そのどちらよりもすばらしい」ゴードンは言い、笑ってテーブルの席に着いた。

「私は夫を褒めてきました」ブランチは続けた。「身に何か起こったかのように、財産でも受け継いだかのように、輝いていて顔色がいい、と彼に言い続けてきました。何かとても悪いことをしていたに違いないから、私たちを面白がらせるためにその話を全部してくれなければいけません。ロングヴィルさん、あなたはきっとすごい

パリっ子でしょうね。私たち三人は愚鈍で有徳な人々で、お互いだけのつき合いに飽き飽きしていて、変わったわくわくさせることを聞きたがっていることを忘れないでください。ちょっとぐらい下品でも構いません」

「君は本当にとても元気そうだね」ゴードンはまだ微笑みながらテーブル越しに友人を見て言った。「ブランチが言う意味が分かるよ」

「ねえゴードン、これはすばらしいことよ」妻は言葉を差しはさんだ。

「これは確かにすばらしいことだ」彼は青い眼、赤い顔で、相変わらず微笑みながら続けた。「でもこれは僕の大きな手柄ではなさそうだ。バーナードの見事な状態は誰をも感動させるだろうから。君は市長の娘との結婚を控えているように見えるよ！」

バーナードの顔色がいいとしたら、彼の顔色はこの時深まったにちがいない。そしてその過程で、健康で幸福そうな表情にいっそう明るい色合いを添えるのに役立ったにちがいない。彼は言葉に窮したが、これは彼の人生でも稀な場面の一つだった。

「それはすごい縁組だね」彼はそれでもおどけてつぶやいた。「僕の得意気な外見は許してくれなくては」

「あまりに気を奪われていて、僕に手紙を書く時間もなかったわけだ」ゴードンは言った。「君が着いてから、便りがあると思っていたんだが」

「二週間前に、つまり君の手紙を受け取る直前に、手紙を出したよ。僕の手紙が着く前に君たちはニューヨークを発ったんだ」

「ああ、手紙は僕らと行き違いになったんだろう」ゴードンは言った。「だがもう君が来てくれたんだから構わないさ。君の手紙ももちろん嬉しいが、この方がずっといいよ」

このように情のこもった言葉を聞いても、バーナードが昼食を楽しんだとは決していえなかった。目の前の、快くない他のことを考えていたのだ。これからアクロバット的な離れ業――幅の広い溝を飛び越えたり、高い棒に登ったり――をしようとしており、骨折や傷を負う予感がしている男のようであった。幸い、彼はあまり話さなくてもよかった。ゴードン夫人が普段以上の快活さを見せて、他の人たちの肩から会話の負担を軽くするという優雅な役を買って出てくれたのだった。

「こんなに急に私たちが出かけてきたので、さぞかし驚かれたと思います」彼女は食事中に言った。「最後にお会いした時には私たちはそんなことは何も言っていませんでした。あなたには何でもお話しするはずですのにね。たしかに私はたくさんのことをお話ししてきました。その中には、あなたが他の人たちにおっしゃらないでいただきたいこともあります。きっとパリ中におっしゃったでしょうね。でもパリでは何をおっしゃっても気にしませんわ。パリは簡単には驚きませんものね。ラブロック大尉は私が言うことを口外しません。分別の鑑と褒めてあげたいです。彼にはずいぶんひどいことも言いましたが、彼はそれが大変気に入って、全部自分だけのものにしていました。ひどいことはラブロック大尉に、良いことは他の方々に言いますの。彼には違いが分かりませんし、まったく満足しているんです」

「しばしば他の方々も違いが分からないよ」ゴードンはまじめに言った。「どちらなのか、お前はいつも我々に言わなければならないな」

ブランチは夫に少々無礼な一瞥を与えた。

「自分が理解されないときは」傲慢に素っ気なくしようと努めながら彼女は言った。「私はプライドが高いので一々言いません。私がプライドが高いのをあなたがご存知かどうか知りませんけど」ゴードンの方へ向き、ラブ

ロック大尉をちらりと見ながら彼女は続けた。「それを知るのは良いことよ。私はプライドが高すぎてそのことを言わないだろうとゴードンは言うだろう思います。でも誰も想像力を持っていない場合はどうすればいいのでしょうか。ロングヴィルさん、あなたには少しはありますわ。でもラブロック大尉にはまったくありません。ゴードンについては、言わずもがなですわ！[5] でも、ロングヴィルさん、あなたでさえ私がおもしろい病人だとは、そして私の微妙な健康状態のために私たちが旅行しているとはご想像になれないでしょう。医者たちは私のことを諦めてはいません。でも私が彼らのことを諦めたのです。私が健康を害しているようには見えないことも分かっています。でもそれは、私がいつもできるだけ綺麗にしていようと努めているからです。私の外見では何も分かりません。まったく何も分かりません。ラブロック大尉、私の外見から何か分かることがありまして」

ラブロック大尉は、じっと真剣な眼でブランチの外見を見た。そして応えた。

「あなたが非常にすばらしいことは分かります」

このお世辞に対して、ブランチは指先で彼に触れた。

「ラブロック大尉に機会を与えるだけでいいのです」彼女はしゃべり続けた。「彼は誰にも劣らず賢いんです。それこそ私が友人たちに行ないたいことです。友人たちに機会を与えたいのです。ラブロック大尉は私が国に置いてきた可愛い青いテリアみたいです。棒を差し出せば、犬はそれを飛び越えるでしょう。棒なしでは飛ばないでしょう。でも私が差し出せば、犬はすべきことが分かります。一瞬それを見て、小さく飛ぶのです。角砂糖を一つ貰えることを知っています。ラブロック大尉も同じように期待します。ラブロック大尉、角砂糖を持ってくるようにベルを鳴らしましょうか。いじらしいでしょう。大尉に角砂糖を一つあげてね。[6] でも私が大尉殿に差し上げるのは、精神的な砂糖です！　いつもこっそりとあげているのですが、あなた方がお出になったら、彼には

すばらしく大きな砂糖をあげましょう」

ゴードンは立ち上がり、バーナードの方を向き、時計を見た。

「ならば立ち去ろう」彼は微笑みながら言った。「そしてラブロック大尉がご褒美をいただくに任せよう。散歩に出かけよう。シャンゼリゼを歩こう。ご機嫌よう、大尉殿」

この申し出にブランチも大尉も反対しなかった。バーナードは女主人においとまを言い、ゴードンに加わった。ゴードンはすでに控えの間に入っていた。

＊　ここに訳出したのはヘンリー・ジェイムズ（Henry James, 1843-1916）の第四番目の長篇小説『信頼』（*Confidence* 一八七九年）の第二十一章から第二十四章までである。第一章から第三章までは、『英文学評論』第七十九集（二〇〇七年二月、京都大学大学院人間・環境学研究科英語部会）に訳出した。そして、第四章から第八章までは『文学と評論』第三集第六号（二〇〇八年十二月、文学と評論社）に、第九章から第十四章までは『英文学評論』第八十一集（二〇〇九年二月）に、第十五章と第十六章は『英文学評論』第八十二集（二〇一〇年二月）に、第十七章から第二十章までは『文学と評論』第三集第七号（二〇一〇年十二月、文学と評論社）に掲載された。底本としては The Library of America 版を使用した。この版は、一八八〇年二月出版のアメリカ初版を再録している。

注

①　このあたりの会話は、小間使いが妙な英語を使うためにちぐはぐなものになっている。

②　フォンテンブロー――Fontainebleau　フランス中北部の都市。パリの南東にあり、もと王室の狩猟場であったフォンテンブローの森の中央に位置する。十六世紀のフランシス一世以降、歴代フランス王の居城があった。

③　甘んじて屈辱を受け入れます――eat humble pie　humble pieは、動物（特に鹿）の臓物で作ったパイ。昔使用人に食べさせたことより、屈辱を意味する。

④　平和通り（リュ・ドゥ・ラ・ペ）――Rue de la Paix　高級繁華街。パリ2区にあり、ヴァンドーム広場からオペラ座まで続く。ナポレオン一世の命により、パリ右岸を開発する計画の一部として一八〇六年建設。このためカプチン修道院が解体された。はじめナポレオン通りと命名されたが、一八一四年、ブルボン王家復位にともない新たな平和を記念して平和通りと改名された。

⑤　言わずもがなですわ！――je n'en parle pas!

⑥　大尉に角砂糖を一つあげてね。――Garçon, un morceau de sucre pour Monsieur le Capitaine!